

目 次



アテネの学堂／ラファエロ作

第1編 青年期と人間としての生き方

第1章 青年期の課題と自己形成	4
第1節 人間性の特徴	4
第2節 青年期の意義と課題	6
1. 青年期の意義	7
2. 適応と個性の形成	10
3. 現代社会における青年の生き方	13
第2章 人間としての自覚	16
第1節 古代ギリシアの思想	16
1. 神話の世界	19
2. 自然哲学者たち	20
3. ソフィストたち	21
4. ソクラテス	23
5. プラトン	26
6. アリストテレス	29
7. ヘレニズムの思想	32
第2節 キリスト教の思想	34
1. ユダヤ教の思想	37
2. イエス	38
3. パウロ	41
4. アウグスチヌス	42
5. スコラ哲学とトマス・アキナス	43
第3節 イスラム教の思想	45
1. マホメット	47
第4節 仏教の思想	49
1. 仏教以前のインド思想	52
2. ブッダ（仏陀）	53
3. 仏教の発展	56

第5節 中国の思想	58
1. 孔子	61
2. 孟子・荀子	64
3. 朱子・王陽明	67
4. 老子	68
5. 荘子	71
テーマ 芸術と人生 「美と芸術の世界」	72

一家
ムーア作

第2編 現代社会と倫理

第1章 現代社会の特徴	74
1. 核家族化の時代	75
2. 高齢化社会の到来	77
3. 情報化社会と人間	79
4. 国際化の時代	82
第2章 現代社会を生きる倫理	84
第1節 近代人の自覚	84
1. ルネサンスの思想家	87
2. ルター	89
3. カルビン	91
4. エラスムス、トマス・モア	93
5. モンテーニュ	94
6. バスカル	95
7. 科学的世界観	96
8. ベーコン	97
9. デカルト	99
テーマ 人間と科学①	
「地球環境問題と環境倫理」	102
テーマ 人間と科学②	
「生命倫理と人間の尊厳」	104
第2節 近代市民社会の倫理	106
1. ホブズ	109
2. ロック	110

3. フランス啓蒙思想	112
4. ルソー	113
5. カント	116
6. ヘーゲル	119
7. スミス	122
8. ベンサム	123
9. ミル	124
テーマ 個人と社会①	
「共に生きる」社会の原理の追究	126
テーマ 個人と社会②	
「社会参加と社会的連帯」	128
第3節 社会主義の思想	130
1. 空想的社会主義	132
2. マルクス	134
3. レーニン, 毛沢東	137
4. 西欧の社会主義	139
テーマ 個人と社会③	
「社会主義思想と現代」	140
第4節 実存主義の思想	142
1. キルケゴール	144
2. ニーチェ	146
3. ハイテッガー	148
4. ヤスパース	149
5. サルトル	151
テーマ 現代の諸思想①「批判理論」	153
テーマ 現代の諸思想②「構造主義」	155
第5節 プラグマティズムの思想	157
1. パース	159
2. ジェームズ	160
3. デューイ	161
第6節 現代のヒューマンイズムの思想	163
1. ガンジー	164
2. シュバイツァー	165

第3編 国際化と日本人としての自覚

第1章 日本の風土と日本人の考え方	166
第1節 古代日本人の思想	166
1. 古代日本人の宗教意識	167
2. 古代日本人の道徳意識	168
第2章 外来思想の受容と日本の伝統	169
第1節 日本仏教の思想	169
1. 聖徳太子	172
2. 最澄	174
3. 空海	175
4. 法然	176
5. 親鸞	177
6. 道元	180
7. 日蓮	183
第2節 日本の儒学と国学	184
1. 朱子学派	187
2. 中江藤樹	189
3. 伊藤仁斎	190
4. 荻生徂徠	192
5. 賀茂真淵	194
6. 本居宣長	195
7. 開明思想家	197
8. 民衆の思想家	198
9. 幕末の思想家	200
第3節 近代日本の思想	202
1. 福沢諭吉	205
2. 中江兆民	207
3. 植木枝盛	208
4. 国家主義の思想	209
5. 内村鑑三	210
6. 幸徳秋水	212
7. 夏目漱石	214
8. 吉野作造	216
9. 西田幾多郎	217
10. 和辻哲郎	219
11. 柳田国男	220
第3章 世界の中の日本人	221
第1節 人類の福祉と世界の平和	221
第2節 地球と人類社会	223
附録 倫理思想史年表	225
索引	234



唐招提寺
金堂



ギリシア
悲劇で使
われた仮
面

第1節 人間性の特質 ～人間とは何か～

●人間は、定義したがる動物である——ちくま哲学の森

人間性の特質

(1) 「人間とは何か」の諸定義

- ・ホモ・サピエンス homo sapiens (知恵ある者)→動物分類学上の人類の学名。
- ・ホモ・ファーベル homo faber (工作する者)→工作する人間の側面を強調。
- ・ホモ・ルーデンス homo ludens (遊戯する者)→現実を離れ自由に遊ぶ面に着目。
- ・ホモ・デメンス homo demens (錯乱する者)→自然から逸脱した人間の在り方。

(2) 現代科学の人間理解

- ・サル学→ヒトとサルの行動様式の類似点と相違点を明らかにし、人間の特性を知る。
- ・分子生物学→生命現象の謎を遺伝情報を司るDNAという遺伝子の解明に求める。
- ・脳研究→生命体の司令塔である脳のはたらきを物質面・情報システム面から解明。
- ・ほかに、精神病理学、文化人類学、社会学などさまざまな角度から人間性を探究。

【学習の内容】 人類は、生物学では霊長目のヒトと呼ばれる。ただ、他の動物は、種に固有の環境世界を作り上げており、それと個体の内的世界との間に、円環的な適合関係を維持している。生を方向づける本能は、その円環的な適合関係の意味を正しく読みとって、個体を安定した生へと導く。

これに対して、生の自然からの致命的なズレ、これが人間の根源的条件である。生の自然からのズレによ

って開かれる人間の世界は、生を方向づける意味の過剰によって特徴づけられる。人間においては、そこに構築しようとする環境世界は過剰な象徴的意味を負われ、生を導く本能も正しい読みを狂わせ、あらゆる方向を指して、同類を殺したり裏切り行為をする。人間は、知性のはたらきによって広い適応力を示しているが、人間自身についての自己理解がえられないという問題に直面する。

資料

資料解説

人間の諸定義

- (1) 万物の尺度は人間である。有るものどもについては、有るといふことの、有らぬものについては、有らぬといふこと。プロタゴラス「打倒論」
- (2) 人間はその本性においてボリス的（政治的、社会的）動物である。アリストテレス「政治学」
- (3) 人間は、自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。しかし、それは考える葦である。バスケル「パンセ」
- (4) 人間は自由なものとして生まれている。しかも、いたるところで鉄鎖につながれている。ルソー「社会契約論」
- (5) 人間、取引きする動物。アダム・スミス「国富論」
- (6) 人間は、ひとびとと一つの社会をつくり、そこにおいて、芸術および学問を通して自己を開化し、文明化し、かつ道徳化するよう、みずからの理性によって定められている。カント「実際的見地からの人間学」
- (7) もし人間が周囲の状況によって作られるならば、人は周囲の状況を人間的に作らねばならない。マルクス、エンゲルス「聖家族」
- (8) 人間とは、一つの総合——無限と有限、時間的なものと永遠なもの、自由と必然の——総合である。キルケゴール「死に至る病」

〈人間の諸定義〉 人類は古来「人間とは何か」について考えてきた。そこに、「人間とは何か」についての定義が生まれきた。定義とは、もっとも矛盾をまねがれている対象についての陳述であるといわれるように、左の西洋思想史の代表的な哲学者・思想家による人間についての定義は、それぞれに、人間の本質をいふたてたものである。けれども、この限られた数の定義をみただけでも、それらは人間の特性の一部を指摘したものにすぎないことに気づく。それほど、人間は決定されないなものであるが、同時に、「人間は生まれながらにして知ることを欲している」といわれるように、「人間とは何か」、「どこから来て、どこへ行くか」という問いにさまざまな分野から挑戦している。

第3節 イスラム教の思想

～人生と宗教②～

礼拝する
イスラム
教徒

●われわれを正しき道に導きたまえ——「コーラン」

イスラム教の思想

○イスラム教
とは

・イスラム教は、7世紀初頭に、アラビアの部族宗教を基盤として、マホメットによって開かれた。6世紀末のアラビア社会は、遊牧社会から商業社会への転換期にあり、部族宗教の偶像崇拝的な多神教の聖地メッカは、通商の発展によって商業都市として発展した。新興の富裕な商人たちはメッカの祭祀権を独占して支配力をつよめ、アラビア社会をささえていた部族の結合意識は失われようとしていた。こうした中にマホメットが現れた。彼は商人として各地を旅し、ユダヤ教やキリスト教の影響を受けて、アッラーに絶対帰依するイスラム教を起し、アラビア半島を統一した。

イスラム—人間の神への絶対的帰依を意味することば。
アッラー—イスラム教の唯一絶対の神で、世界と人類の原初（創造）から終末（審判）に至るまで、すべてを支配する。偶像禁止。
マホメット—40歳のころ、神の啓示を受け、神の使徒・預言者としての自覚をもつ。
コーラン—イスラム教の聖典・天使ガブリエルを通して、マホメットに啓示された神のことばの集成。

イスラム教の思想の特色と背景

① イスラム教の思想の特色

(1) **厳格な一神教** イスラム教では、神と人間との関係はまさに「イスラム」（人間の神への絶対的服従）として表現されるように、人間の正しい生き方は、絶対的な唯一神・アッラーの示す一元的な教えを信ずることにある。それは、温暖な気候のモンスーン地帯と異なり、砂漠の乾燥地帯では、生命に至る道であり、救いに至る道であった。このようにイスラム教の世界では、まず神の定めた生活規範に、人間はただ絶対的に服従することを求められる。

(2) **聖俗不分** イスラム教は、個人の宗教的生活だけでなく、現世的生活にかかわるさまざまな行為規範をもつ。イスラム教は日常生活から離れて存在するのではなく、日々の生活そのものの中にある宗教といわれる。また、イスラム教には僧侶や祭司といった特別の階級や位階制度もない。ただ、普通の日常生活において、各人がその行いをより正しいものになろうとすることがあるだけである。そして、何が正しい行為であるかは、神の定めた規範に示されている。そこにみられるのは、徹底した平等主義・在家主義の精神である。

② イスラム教成立の背景

(1) **アラビアの自然と生活** アラビア半島の大部分は遊牧民が生活している乾燥地帯——砂漠である。人々はきびしい自然に対抗する必要から部族単位で生活し、部族の掟に従う義務や部族会議に参加する権利をもっていた。一方、中部アラビアのオアシスや海岸近くには古くから都市が発生し、小規模な農業や交易が行われていた。イスラム教発生以前から、アラブ人は信心深く、自然神や多くの神霊を信じていた。メッカは、2世紀のころから参詣人や巡礼が訪れる聖地であった。

(2) **部族社会の変動** マホメットの祖先の属したクライシュ族が遊牧生活をすててメッカに定住し、その支配権と神殿の管理権を得たのは5世紀末のことである。このころ、シリアからアビシニア（エチオピア）まで東西貿易が栄え、メッカは、中継貿易の独占権をもつ商業都市として繁栄するようになった。商業の発展にともなって、遊牧社会をささえていた部族の結合は弱まり、人々は商業利益によって動かされるようになった。イスラム教は、このような部族社会の変動という危機的な状況を背景として生まれた。